

編集を終わった段階で、私たちは、総括の意味で雑談会を開いた。そのときの主な発言をつぎにかかげておく。

——編集の過程で数千の作品をみてきたわけだが、へすぐれた詩は、同時に状況ときびしく結びついている」ということを、いままらのように実感した。

えらびだした詩は、うまいへたを別にして、状況との関係のあり方、その密度に比例してそれぞれある到達点をもっていると思う。

——このことは、いわゆる詩人でない多くの詩の書き手、読み手と「詩」との関係、あるいは「詩の存在論的意味」を示唆している。

これを逆に言えば、多くの無署名又は、仮名で発表された作品がそれぞれのもとして存在の意味をもっているのは、まさにその時代状況にどれだけ人間としてコミットしているかにかかっているといえよう。

——このアンソロジーは、まずひとつひとつの作品内容としてだけでなく、その総体が示すものの「現代史の記録、その精神の証言」という視点から見られること、そうみてもらうことよってかえって真の詩集たりうるものが主張できると思う。

——ぼくは、ガリ版詩集をつくっている関係で、こんどの仕事はよい勉強になった。ぼくの場合、ひとつの運動にコミットしたかたちで、詩集づくりをやってきたので、参加してくる人たちの作品のテーマが、そのことに制約されて、作品の幅が限定されてしまうということがあった。このアンソロジーでは、書き手がそれぞれ状況から卒直に自分を突き出しているため、それが支配してくるものに対する痛烈な反撃となっている。詩の書き手たちは、いいたいこと、表現したいことをたくさんもっている。一つの決意がすでに詩になっている——そんな感慨を作業を終わって強く抱いている。

——その意味で、このアンソロジーは、まだ古くさい表現形式をしつばにまといながら、しかも新しい詩の可能性というか前衛的な部分とのからみあいとともにある。そして、内容的にも非常に多様なひろがり内蔵している。

——前衛的といえば、戦後——約二十年ほどまえ「京浜の虹」とか「日本前衛詩集」という名での、当時の時代状況を反映したアンソロジーが出たことがある。

いわゆる、活動家優等生のイサマシイ作品が印象にのこっているが、こんどの企画の場合、広い範囲からあつめたにもかかわらず、ほとんどそのようなイサマシイものがなかったのは特徴的なことだった。

それはまた、当時の政治的季節に対するきわめて政治的な対応に対して、現代社会そのものの方向としての反政治的状況と人々の心情をあらわすものだと言えら

ろう。

——収録作品の書きての大部分は、二〇代の若い人だ。ということ、彼らは、六〇年のあの昂揚と急速な退潮を実感としては知らない。そのことが作品の上に屈折したかたちで突出し、ある意味での樂天性——ふてぶてしき、開きなおり、たとえ「オレはたかかうがマスもかくぞ」といった叫びになるわけだ。

——六〇年闘争は集団として昂揚し、集団として下降していった。いわば規律統制型の闘争であった。これに対して七〇年闘争の特徴は「さざ波型」といえるだろう。根底的な意味で劇的な昂揚もなかったし、その裏がえしとして挫折もなかった。つまり七〇年闘争は、各政治セクト集団にしても、集団そのもののなかの「個人」の自立の闘いを問われるたかいかい」としてあったのだと思う。「戦士のうた」的なイサマシイ作品がみられなくなったのは、そのような「自立」の内面を反映している。

——七〇年安保に登場した市民たちを集団の支配から脱け出る「個」の蜂起としてばくはとらえたい——「個」が、その状況と切り結びながら多様な反政治的運動をかたちづくってきた。

——同時に、六〇年闘争以後の風潮のなかには、挫折予見性というか、どうせダメだという政治的ニヒリズムが底流としてあることも一つの事実としていつておきたい。

——挫折予見性というより、挫折に対する耐性、即応というか、あれがダメならこれという転換の免疫体質がたかかう側にできつつあった。

——言葉をかえれば、それは自分の姿を実存的に見得るということだ。それが作品の上では柔軟性、パネとなっている。

——なぜデートしたらあかんのか、なぜマスかいたらあかんのか、といったつぶやきは少なくとも六〇年にはなかった。即ち政治的組織的に現われにくかった。しかしそうした禁欲主義は払拭された。

——「左翼進軍ラッパ」につきまとうウソやカラ威張りを知った者たちの、ひとりぼっちの歌、しかし同時に統一されざる者の、それゆえにこそ独立し自由を連合する者の歌、これがこの詩集の性格だと思ふ。

——ここに現われている限り、現代ほど心情として「反政治」的な状況はない。それをこの詩集をつくる過程で、またできあがったもののみで強く感じた。同時に「心情としての反政治」が、どのように論理化され実務化されていくか、また、させねばならないかをいつそうきびしく自分の問題として確認した。

〈追記〉

私たちが手わけしてとりくんだ資料は、ビラ、ポスター、檄文などをふくめて約三千点、詩の作品数ではその数倍におよんだ。同じ書き手による複数の作品もそこには含まれているわけだが、私たちに可能な限りの力をつくしたと考えている。

収録作品は、ページ数の関係で約百篇にしぼらざるを得なかった。この選たくの作業は、無名の生活者のすべての声を——と願っていた私たちにとって、たとえようもなく苦痛であった。

雑誌の廃刊、ビラ、檄文などで連絡先不明のもの、また、作者、筆者の氏名不詳、パンフレットその他で連絡先の部分が破損しているもの——あるいはその他の事情で作者、筆者の掲載諒解を得られなかった作品も、この詩集には含まれている。さ

らにページ数の都合から、やむを得ず長い作品には「部分収録」の方法をとらざるを得なかった。あわせてお許しを乞うしだいである。

一九七三年 七月

〈日本反政治詩集〉編集委員会

猪野 健治

長谷川修児

寺島 珠雄

向井 孝

レイアウト

中原 康博

カメラ

幡谷 紀夫

〈編集部より〉

作品の筆者には、本詩集を一冊ずつ贈呈することになっております。前記の事情で連絡もれの方は、立風書房編集部「日本反政治詩集」係あてご一報下されば、さっそくお送り申し上げます。

編者の横顔

(いろは順)

猪野 健治 (ルポ・評論)

1933年滋賀県生まれ。元詩グループ「NON同盟」を主宰。

著書に「親分」「民衆宗教の実像」ほか多数。部落問題研究所会員。

長谷川修児 (詩人)

1932年生まれ。詩のベ平連世話人。「遊撃」「ベトナム反戦詩集」を編集発行。

寺島 珠雄 (詩人・ルポ・評論)

1925年生まれ。釜ヶ崎解放運動に参加。釜ヶ崎の詩人として知られる。

現在「釜ヶ崎事典」を編集中。新日本文学会会員。

向井 孝 (詩人・評論)

1920年生まれ。戦後、詩グループIOM同盟を主宰し、イオミズムをかかげ現代詩の世界に特異な影響を与えた。現在、個人評論誌「IOM」を発行。

主著に「暴力論ノート」がある。新日本文学会会員。

日本反政治詩集

編者||向井孝ほか

発行者||下野 博

発行所||立風書房

東京都品川区東五反田三―六―一八

電話||東京(四四七)一一九一

振替||東京七四四九三

印刷所||廣濟堂印刷株式会社

(乱丁本・落丁本はお取替えいたしません)
〇〇九三―五一一三三―八九〇九

日本反政治詩集



1973年10月10日 第1刷発行

¥ 750

立風書房刊

実証・日本のやくざ

●アウトロー集団の生態を描く異色ドキュメント

紙芝居昭和史

●黄金バットは生きている！ 異色庶民昭和史

犯罪的放浪

青春を漂泊する若者が描く愛と罪の白書

夜明けII ジョーン・バエズ自伝

うたうこと・愛すること・バエズの青春

オリーブの墓標

●スペイン市民戦争で死んだ日本人の記録

井出英雅

600

加太こうじ

640

岸田淳平

530

小林宏明 訳

750

石垣綾子

520